

花ちゃん、オー君、モンタ博士のわくわくドキドキ冒険記3

国立市立国立第七小学校

平成27年4月20日 NO.8 (208)

オー君 「モンタ博士！今日は『ツバキ』を科学するんですね。」

花ちゃん 「つまり、ツバキの形や色、その他のことについて、なぜそうなのかがいろいろと勉強することですね。」

モンタ博士 「そうだね。それではみんなでいろいろ考えていこう。わからないことや疑問に思ったことなど、何でもいいから聞いてよ。今日は質問会にしよう。」

オー君 「まず、どうして『ツバキ』という名前になったのかな。」

モンタ博士 「よく見てごらん。ツバキの葉っぱは『つや』があるだろう。それで、『つやき』が『ツバキ』になったのさ。また、厚い葉なので、『厚葉木』が由来さ。」

花ちゃん 「でも、モンタ博士！どうしてツバキの葉って、そんなに光っているのですか。」

モンタ博士 「いい質問だね。そのようになぜ？どうして？と不思議に思うことが大切だね。あのね、ツバキの葉のように光っているものには、葉の中にクチクラというワックス層があるからためさ。」

オー君 「え！クラクラ？難しいお話だと、頭がクラクラするよ。」

モンタ博士 「そうじゃないよ。クチクラとは、もともとはラテン語で、Cuticula と書くんだけど、英語読みすると『キューティクル』ということ。シャンプーやリンスのコマーシャルで聞いたことないかな。」

花ちゃん 「そういえば、聞いたことあるわ。髪の毛をキューティクルに守るとかいうわ。」

モンタ博士 「キューティクル、つまりクチクラは、表面をおおうワックスとして、葉っぱの内側を乾燥などから守る働きがあるのさ。」

オー君 「なるほど、ツバキが冬の乾燥や寒さをがまんして、緑の葉っぱをつけていられるというのは、このクチクラとういうもののおかげなのですね。」

モンタ博士 「それだけじゃないよ。このように葉の表面がテカテカに光るような木、これを難しい言葉で照葉樹というけど、自動車の排気バスやけむりなどからも葉っぱを守っているのさ。」

花ちゃん 「なるほど、そういうことなんですね。ところで、ツバキって、^{はな}花もステキね。」
モンタ博士 「そうだね。ツバキはね、もともと^{にほん}日本に^{むかし}昔からあった^き木でね、^{うつく}美しい^{はな}花をながめるためにも、^{ふる}古くから^{にわ}庭に^う植えていたらしいんだ。」
オー君 「山からもってきてお庭に植えたんですね。」
モンタ博士 「それで、ツバキには^{しろ}白や^{ピンク}ピンク、それに^{やえざ}八重咲きとって、^{はな}花びらがたくさんのものもあるんだよ。」
花ちゃん 「え！ツバキって、^{あか}赤だけじゃないのですか。」
モンタ博士 「^{えんげいひんしゅ}園芸品種とってね、^{むらまちじだい}室町時代からいろいろな^{めずら}珍しいツバキを^{つく}作ってきたそうなんだ。^{えどじだい}江戸時代はとくにたくさんの^{しゅるい}種類ができたらしいよ。^{した}下の^え絵は、その^{えんげいひんしゅ}園芸品種だね。^{はな}花びらがたくさんあるのがわかるかな。」



ツバキのつぶやき

ツバキは日本の花なのよ。学名もカメリア・ヤポニカというの。野生種としては、本州以南の暖地に広く自生するヤブツバキと、日本海側の多雪地帯にその分布が限られる変種のユキツバキというのがあるのよ。ツバキははるか上代から人々に身近な花だったの。古事記や日本書紀にもその名が登場するんだからすごいでしょ。長生きで四季を通じて青々とした葉をつけ、花のすくない冬から早春に見事な赤い花を咲かせるツバキは繁栄の象徴でもあったの。ツバキは材が緻密で固く、木槌の他にも木魚や楽器などにも使われたんです。また、種子からは高価な椿油が採れて、油かすもシャンプー代わりにできるんですからね。ツバキがヨーロッパに紹介されたのは、18世紀ころなのよ。西洋では常緑樹が少なく、艶やかで緑の葉と赤い情熱的な花は人々に驚きと感動を与えたということなのよ。つまり、あちこちで私は称賛されてしまったのね。フランスではツバキのコサージュがめちゃくちゃに流行したそうで、美しい貴婦人の皆様のドレスを飾ったのも私なのよ。すごいでしょ。デュマ・フィス作、ベルディ作曲のオペラ「椿姫」が熱狂的に支持されたのもこの頃のことね。もう懐かしいお話ね。